

複素解析空間上の formal Poincare and Dolbeault 補題について

京大 数理解析 藤永 明

X は複素多様体, Y は X の解析的部分集合, $U = X - Y$,

$j: U \rightarrow X$ は包含写像とする。また Ω_X, E_X は各々 X 上 holomorphic,

j^* は C^∞ の de Rham 複体とする。 J は X 内 Y の定義関子 p

を $J \in \mathcal{O}_X$ の共役として $J = (J + \bar{J})E_X$ ($E_X = E_X^0$ は X 上複素数値 C^∞ 函数の層) とおく。この時, Ω_X, E_X の Y に関する完備化,

$\hat{\Omega}_X, \hat{E}_X$ は次のように定義する。

$$\hat{\Omega}_X = \varprojlim \Omega_X / J^{n+1} \Omega_X, \quad \hat{E}_X = \varprojlim E_X / J^{n+1} E_X$$

この時次が成立する。

定理 1. $0 \rightarrow \mathcal{O}_Y \rightarrow \hat{E}_X \xrightarrow{d} \hat{E}_X^1 \rightarrow \hat{E}_X^2 \rightarrow \dots$

は \mathcal{O}_Y の resolution を与え、 \rightarrow の列は完全列。ここに \mathcal{O}_Y

は Y の \mathbb{C} をファイバとして与える constant sheaf.

同様に formal Dolbeault complex

$$\hat{E}_X^{0, \cdot} = \varprojlim E_X^{0, \cdot} / J^{n+1} E_X^{0, \cdot}$$

を考へると,

定理 2. $0 \rightarrow \hat{\mathcal{O}}_X \rightarrow \hat{\mathcal{E}}_X^{0,1} \rightarrow \hat{\mathcal{E}}_X^{0,2} \rightarrow \hat{\mathcal{E}}_X^{0,3} \rightarrow \dots$

は $\hat{\mathcal{O}}_X$ の resolution を与える。 ($\hat{\mathcal{O}}_X = \hat{\Omega}_X^0$)

定理 1, 2 をあわせて直ちに次の系を得る。

系. $0 \rightarrow \mathcal{C}_Y \rightarrow \hat{\mathcal{O}}_X \rightarrow \hat{\Omega}_X^1 \rightarrow \hat{\Omega}_X^2 \rightarrow \dots$ (formal analytic Poincaré lemma).

Sasakura [11], Hartshorne [4].

今 $\mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X = \varprojlim_n \mathcal{J}^{n+1} \mathcal{E}_X = \bigcap_n \mathcal{J}^{n+1} \mathcal{E}_X$ とおくと 命題 1 より詳しく次が成立する。

定理 1'. 次の可換図式が存在し、各行は完全列、かつ F 行は Y 上の resolution を与える。

$$(1) \quad \begin{array}{ccccccc} 0 & \rightarrow & j_! \mathcal{C}_Y & \rightarrow & \mathcal{C}_X & \rightarrow & \mathcal{C}_X \rightarrow 0 \\ & & \downarrow & & \downarrow & & \downarrow \\ 0 & \rightarrow & \mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X & \rightarrow & \mathcal{E}_X & \rightarrow & \hat{\mathcal{E}}_X \rightarrow 0 \end{array}$$

(\mathcal{C}_X は $j_!$ の direct image with proper supports, 従って $j_! \mathcal{C}_Y$ は定数層 \mathcal{C}_Y の Y 上零とおく。 X に拡張 ($\mathcal{C}_X = \mathcal{C}_Y \otimes \mathcal{O}_X$)

注意 1. 定理 2' に対応する図式は、次のようになる。

$$(2) \quad \begin{array}{ccccccc} 0 & \rightarrow & j_! \mathcal{O}_Y & \rightarrow & \mathcal{O}_X & \rightarrow & \hat{\mathcal{O}}_X \rightarrow \hat{\mathcal{O}}_X / \mathcal{O}_X \rightarrow 0 \\ & & \downarrow & & \downarrow & & \downarrow \\ 0 & \rightarrow & \mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X^{0,0} & \rightarrow & \mathcal{E}_X^{0,0} & \rightarrow & \hat{\mathcal{E}}_X^{0,0} \rightarrow 0 \end{array}$$

よって、定理 2' は、 $\mathcal{H}^0(\mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X^{0,0}) \cong j_! \mathcal{O}_Y$, $\mathcal{H}^1(\mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X^{0,0}) \cong \hat{\mathcal{O}}_X / \mathcal{O}_X$, $\mathcal{H}^i(\mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X^{0,0}) = 0, i \geq 2$ を意味し、逆にこれ¹² 定理 2' を帰結する。

注意 2. Y の 各点 局所既約ほう $\mathcal{J} = \{ \phi \in \mathcal{E}_X; \phi(y) = 0 \ \forall y \in Y \}$ は、つまり Y 上消える C^∞ 函数の全体。(cf. Kantor [7], Malgrange [8])

証明は次の2段階にわかれる。

Step 1. Y が X 内の divisor with normal crossings の場合に
具体的に構成によつて定理を示す。

\tilde{X} 非特異かつ

Step 2. 一般の場合には, $f: \tilde{X} \rightarrow X$ なる固有双有理写像で,
 $\tilde{Y} = f^{-1}(Y)$ とおくと 1) $f|_{\tilde{X}-\tilde{Y}}: \tilde{X}-\tilde{Y} \cong X-Y$, 2) $\tilde{Y} = f^{-1}(Y)$ が
 \tilde{X} 内の divisor with normal crossings となる, の2条件をみたす
ものが存在する (cf. Hironaka [6]), (\tilde{X}, \tilde{Y}) に対する結果 (Step 1) から
 (X, Y) に対する結果を導く。

以下 Step 2 について述べる。

まず問題は局所的であるから, X は $\mathbb{C}^m = \mathbb{C}(z_1, \dots, z_m)$ の開集
合とみなしてよい。さらに $z_i = x_{2i-1} + \sqrt{-1}x_{2i}$ とおいて $\mathbb{C}^m \cong \mathbb{R}^{2m} =$
 $\mathbb{R}^{2m}(x_1, \dots, x_{2m})$ と同一視する。このとき $\dim_{\mathbb{C}} X = m$, $n =$
 $2m$ とおき, $I = (i_1, \dots, i_n)$ は整数 $i_\alpha \geq 0$ の n 組を表す。 $|I| =$
 $\sum i_\alpha$ とおく。

定義 1. [8, I, Def. 2.3] a) 整数 $k \geq 0$ に対し, Whitney の意味での
 Y 上の C^k 関数の層 ${}_{k}\tilde{E}_Y$ は次の前層により定める: $V \in Y$ の
任意の開集合とすると, ${}_{k}\tilde{E}_Y(V) = \{ (g_I); |I| \leq k, g_I \text{ は } Y \text{ 上}$
の連続関数 } 以下に述べる条件 (#) をみたす。 b) $\tilde{E}_Y = \varprojlim {}_{k}\tilde{E}_Y$
とおく。 Y 上の (Whitney の意味での) C^∞ 関数の層をいう。 (${}_{k}\tilde{E}_Y$ の
定義から自然にそれらが射影的系となることかわかる。)

2つ条件 (#) を説明する。まず任意の $y \in Y$ と Y 上の連続関

の組 $G = (g_I)$ に対し, 多項式 $T_y^k G(x)$ は式

$$T_y^k G(x) = \sum_{|I| \leq k} (x-y)^I / I! g_I(y)$$

で定義する. ここに $(x-y)^I = \prod (x_{\alpha} - y_{\alpha})^{i_{\alpha}}$, $I! = i_1! \cdots i_n!$. この

$T_y^k G$ を用いて $R_y^k(G) = (R_y^k(G)_I), |I| \leq k$, は式

$$R_y^k(G)_I = g_I - \partial^I (T_y^k G) / \partial x^I$$

により定義する. この時条件 (#) は

$$(\#) \quad \forall I \text{ に対し } |R_y^k(G)_I(x)| = o(|x-y|^{k-|I|}) \quad \forall x, y \in Y, \\ |x-y| \rightarrow 0$$

定義により, 自然写像 $r: E_X \rightarrow \tilde{E}_Y$ が存在する. 実際,

$r(h) = (\partial^I h / \partial x^I)_I$ とすればよい. 今 r の核を $E_{X,Y}$ とする.

明らかに, $E_{X,Y}$ は X 上の C^∞ 関数で, Y の各点で任意階の導関数が零になるもの, であり flat along Y なるものを全体を表す.

定理 (Whitney) [8, I, Th. 4.1] r は全射であり従って r は完全列である.

$$(3) \quad 0 \rightarrow E_{X,Y} \rightarrow E_X \rightarrow \tilde{E}_Y \rightarrow 0$$

また我々の第 1 の observation は, (1) の下行 ($\cdot = 0$) が (3) と自然に同形であり従って r 上の Whitney の定理により, 完全列であることである. また定義から自然の包含写像 $i: \mathcal{J}^\infty E_X \rightarrow E_{X,Y}$ が存在することには注意する. i が r による全射であることを示すことは, 次の Malgrange の定理の結論である.

定理 (Malgrange) [8, VI, Th. 1.1'] $U \in \mathbb{R}^n$ の開集合, f_1, \dots, f_0

補題 1. $f: \tilde{X} \rightarrow X \in \text{Step 2}$ のとき成り立つ時次が成立。

$$f_* \tilde{f}^{\infty} \mathcal{E}_{\tilde{X}} = f^{\infty} \mathcal{E}_X.$$

ここに $\tilde{f} = (f + \tilde{g}) \mathcal{E}_{\tilde{X}}$, \tilde{g} は \tilde{Y} の定義イデアルの層。

証明. $D \in X$ 上の任意の微分作用素とする。この時任意の $\tilde{x} \in \tilde{X}$ に対し \tilde{x} の近傍で定義された微分作用素 $\tilde{D}_{\tilde{x}}$ および正則関数 $h_{\tilde{x}}$ が存在し、任意の $g \in \mathcal{E}_X$ に対し、 $(Dg) \circ f = \tilde{D}_{\tilde{x}}(g \circ f) \cdot (1/h_{\tilde{x}})$ が成立する。(cf. Poly [9, 4.4])。さて任意の $\tilde{g} \in f_* \tilde{f}^{\infty} \mathcal{E}_{\tilde{X}}$ に対し、明らかに一意の連続関数 g on X が存在し $\tilde{g} = g \circ f$ となる。補題はこの g が C^{∞} から $g \in f^{\infty} \mathcal{E}_X$ を示せば示される。これは上の注意と次の事実から従う。任意の $g_1 \in \tilde{f}^{\infty} \mathcal{E}_{\tilde{X}}$ と任意の $h_1 \in \mathcal{O}_{\tilde{X}}$ に対し $g_1/h_1 \in \tilde{f}^{\infty} \mathcal{E}_{\tilde{X}}$ (cf. [8, IV. Prop. 1.4])。

これから直ちに定理 1' が従う。実際、Step 1 での同形 $\tilde{j}_! \mathcal{C}_{\tilde{U}} \cong \tilde{f}^{\infty} \mathcal{E}_{\tilde{X}}$ に対し Rf_* を作用させると、左辺は、 $Rf_*(\tilde{j}_! \mathcal{C}_{\tilde{U}}) \cong Rf_* \tilde{j}_! \mathcal{C}_{\tilde{U}} \cong Rj_! \mathcal{C}_U \cong j_! \mathcal{C}_U$, 右辺は、 $Rf_* \tilde{f}^{\infty} \mathcal{E}_{\tilde{X}} \cong f_* \tilde{f}^{\infty} \mathcal{E}_{\tilde{X}} = f^{\infty} \mathcal{E}_X$ となる。(ただし計算は可換 \mathbb{C} -ベクトル空間の層の \mathbb{A}^1 -ベル圏の derived category で念之として。) したがって同形 $j_! \mathcal{C}_U \cong f^{\infty} \mathcal{E}_X$ が自然にも一致する事も容易にわかる。

定理 2 のためにはさらに次の補題に注意する必要がある。

補題 2. $f: \tilde{X} \rightarrow X \in \text{Step 2}$ のとき成り立つ時次が成立する。

$$\hat{f}_* \hat{\Omega}_{\tilde{X}}^p \cong \hat{\Omega}_X^p, \quad R^{\delta} f_* \hat{\Omega}_X^p \cong R^{\delta} \hat{f}_* \hat{\Omega}_{\tilde{X}}^p, \quad \delta \geq 1.$$

実際 Banica [1] に より, $R^0 f_* \widehat{\Omega}_X^p \cong R^0 \widehat{f}_* \widehat{\Omega}_X^p, \forall p \geq 0.$ $\epsilon = 3$
 が $p \geq 1$ の時, $R^i f_* \Omega_X^p$ の台は Y 上にあるから, $R^i f_* \widehat{\Omega}_X^p \cong R^i f_* \Omega_X^p$
 である. f は X の非特異だから $f_* \Omega_X^p \cong \Omega_X^p$ である.

定理 2 の証明. Step 1 に示された (\tilde{X}, \tilde{Y}) に関する結果を, ^{完全}列

$$0 \rightarrow \mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X^0 \rightarrow \mathcal{E}_X^0 \rightarrow \hat{\mathcal{E}}_X^0 \rightarrow 0$$

に対し, Rf_* を作用させて long cohomology exact sequence をとると
 結果から,

$$0 \rightarrow \mathcal{H}^0(\mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X^0) \rightarrow f_* \mathcal{O}_X \rightarrow \widehat{f}_* \hat{\mathcal{O}}_X \rightarrow \mathcal{H}^1(\mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X^0) \rightarrow R^1 f_* \mathcal{O}_X \rightarrow$$

$$R^1 \widehat{f}_* \hat{\mathcal{O}}_X \rightarrow \mathcal{H}^2(\mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X^0) \rightarrow R^2 f_* \mathcal{O}_X \rightarrow R^2 \widehat{f}_* \hat{\mathcal{O}}_X \rightarrow \dots$$

を得る. 補題 2 の $p=0$ の場合から, 容易に $\mathcal{H}^0(\mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X^0) \cong j_! \mathcal{O}_U, \mathcal{H}^1(\mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X^0) \cong \hat{\mathcal{O}}_X / \mathcal{O}_X, \mathcal{H}^i(\mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X^0) = 0, i \geq 2$ を得る.
 注意 1 に より これにて定理の証明が終わる.

一方同じ Step 1, Step 2 の後, ϵ 系 の証明も直接に得られるこ
 とがわかる. (本質的に T. Bloom の [12, Prop. 3.1] の証明
 と同じ.) さらにこの方法では, 笹倉氏の講演で述べられたよ
 うに精密な形をも与えうる. (ここには述べないが.)

系 (補題) の証明. 補題 2 に より, 2 つの複体 $f_* \Omega_X^p$ と $\widehat{f}_* \hat{\Omega}_X^p$ の
 間の自然写像が quasi-isomorphism であることを見ればよい.

このため 2 つのスペクトル列 $E_2^{p,q} = H^p(R^q f_* \Omega_X^p) \Rightarrow R^p f_* \Omega_X^p,$
 $\hat{E}_2^{p,q} = H^p(R^q \widehat{f}_* \hat{\Omega}_X^p) \Rightarrow R^p \widehat{f}_* \hat{\Omega}_X^p$ と比較する. 普通の Poincaré 補題
 の Step 1 から $R^0 f_* \Omega_X^p \cong R^0 \widehat{f}_* \hat{\Omega}_X^p \cong R^0 f_* \mathcal{O}_X$ である. 一方

補題 2 により $E_2^{p,0} \cong \hat{E}_2^{p,0}$, $\delta > 0$, が成立する。これから

$E_2^{p,0} \cong \hat{E}_2^{p,0}$ が従う。

証明方法は、実際にはもう少し一般の結果を与える。

【 1. 可分性,]

定理 3. X を複素空間, Y を X の部分空間で X の singular locus を含むものとする。この時次の成立する: 自然写像

$$\alpha: \Omega_{X|Y} \cong \hat{\Omega}_X$$

は quasi-isomorphism. α は $\Omega_{X|Y}$ は Ω_X の Y への sheaf theoretic 制限. (Y が 1 葉の時 α は Bloom の定理)

次に (1) 及び (2) の下列の analytic な表現を求めることを考える。 $M(X)$ は O_X -加群の T - \mathcal{A} - \mathcal{A} - \mathcal{A} 圏, $\mathcal{C}(X)$ は O_X -加群の複体 $\{F^i\}_{i \in \mathbb{Z}}$ での微分 $d_i: F^i \rightarrow F^{i+1}$ が 1 階の微分作用素であるもの \mathcal{A} - \mathcal{A} 圏とする。 $\mathcal{C}(X)$ における射 $F \rightarrow G$ は O_X -線形写像 $f^i: F^i \rightarrow G^i$ の組で $d_{i+1} \circ f^i = f^{i+1} \circ d_i$ を満たすものとして与えられる。(詳しくは [5, §1] 参照) $M(X), \mathcal{C}(X)$ 共に enough injectives を持つ \mathcal{A} - \mathcal{A} 圏である。($\mathcal{C}(X)$ については [1, Prop. 2.1]) $M(X)$ は $F \in \text{Ob } M(X)$ に対し $F^i \in \mathcal{C}(X)$ を $F^0 = F, F^i = 0, i \neq 0$ で定義することにより $\mathcal{C}(X)$ の部分圏とみなす。 $DM(X), D\mathcal{C}(X)$ は $M(X)$ 及び $\mathcal{C}(X)$ の導来圏を表す。上の注意により $DM(X)$ は $D\mathcal{C}(X)$ の部分圏とみなしてよい。(cf. [3, p.377]). LX は F で定義

する関数 $\mathcal{L}(X) \rightarrow \mathcal{L}(X)$, $D\mathcal{L}(X) \rightarrow D\mathcal{L}(X)$ について、この意味は、 $\mathcal{M}(X)$, $D\mathcal{M}(X)$ を保存するものが直ちにわかる。

また $\mathcal{L}(X) \rightarrow \mathcal{L}(X)$ は左完全関数 $j_1^m(\mathcal{F})$, $\hat{I}(\mathcal{F})$ を

$$j_1^m(\mathcal{F}) = \varprojlim_R \Sigma_k(\mathcal{F}), \quad \hat{I}(\mathcal{F}) = \varprojlim_R \mathcal{F} / \Sigma_k(\mathcal{F})$$

で定義する。ここに $\Sigma_k(\mathcal{F}) = g^k \mathcal{F} + d(g^k \mathcal{F}^{-1})$. $Rj_1^m, R\hat{I}$ と共に j_1^m, \hat{I} の導来関数とする。

補題 3 $\mathcal{F} \in \text{Ob } \mathcal{L}(X)$ に対し、次の functorial triangle が $D\mathcal{L}(X)$ において存在する。(cf. [3, I §1])

$$(4) \quad \begin{array}{ccc} & \hat{\mathcal{F}} & \\ & \swarrow & \searrow \\ Rj_1^m(\mathcal{F}) & \longrightarrow & \mathcal{F} \end{array}$$

証明. $\text{pro-}\mathcal{L}(X)$ の自然数により添数をつけられた $\mathcal{L}(X)$ の objects の射影系を可算アーベル圏とする。この時射影的極限 \varprojlim は $\text{pro-}\mathcal{L}(X) \rightarrow \mathcal{L}(X)$ の左完全関数とみられる。その右導来関数を $R\varprojlim$ で表す。さて今任意の \mathcal{F} に対し

$$0 \rightarrow (\Sigma_k(\mathcal{F}))_k \rightarrow (\mathcal{F})_k \rightarrow (\mathcal{F} / \Sigma_k(\mathcal{F}))_k \rightarrow 0$$

は、 $\text{pro-}\mathcal{L}(X)$ における完全列。従って $R\varprojlim$ を作用させて $D\mathcal{L}(X)$ に

おける triangle

$$\begin{array}{ccc} & R\hat{I}(\mathcal{F}) & \\ & \swarrow & \searrow \\ Rj_1^m(\mathcal{F}) & \longrightarrow & R\mathcal{I}(\mathcal{F}) \end{array}$$

を得る。 $(\mathcal{F})_k$ は $\mathcal{F}_k = \mathcal{F}$ の constant system, $\mathcal{F} = \mathcal{I}(\mathcal{F}) = \varprojlim_{\text{def}} (\mathcal{F})_k$

明らかなら $R\mathcal{I}(\mathcal{F}) \cong \mathcal{F}$. 一方 $R\varprojlim^i = 0, i \geq 2$ (Roos) (cf. [4,

I. Prop. 4.1), \exists $\gamma: \mathcal{F}/\Sigma_k(\mathcal{F}) \rightarrow \mathcal{F}/\Sigma_{k-1}(\mathcal{F})$ surjective γ の Mittag-Leffler 条件をみたし $R^1\varprojlim(\mathcal{F}/\Sigma_k(\mathcal{F})) = 0^{*)} \Rightarrow R\varprojlim(\mathcal{F}/\Sigma_k(\mathcal{F})) \cong \varprojlim \mathcal{F}/\Sigma_k(\mathcal{F})$. (*). [4, I, Cor. 4.3]) さらに $\varprojlim \mathcal{F}/\Sigma_k(\mathcal{F}) \cong \varprojlim \mathcal{F}/g^k \mathcal{F} = \hat{\mathcal{F}}$. Q.E.D.

(4) を用いると (1), (2) の analytic な表示が次のように得られる。

命題 1. (1) (4) で $\hat{\mathcal{F}} = \Omega_X$ とおく。すると (4) は, $D\mathcal{C}(X)$ に於て, 完全列 (1) の '下行' ($\mathcal{C}(X)$ 内で考えられる) に同伴の triangle と自然に同形である。 (2) $\mathcal{F} \in X$ との解析的連接層とし, $\hat{\mathcal{F}} = \hat{\mathcal{F}}$ (すなわち $\mathcal{F} \in \mathcal{M}(X)$) とする。この時 (4) は, $DM(X)$ において完全列 (2) の '下行' $\hat{\mathcal{F}}$ に同伴の $DM(X)$ における triangle と自然に同形である。

(注). \mathcal{A} - \mathcal{A} 圏における完全列はその導来圏における triangle と自然に定まる。 [3, p.63 Remark]

命題の証明の前に 2) について解説しておく。まず定理 2 は任意の連接 \mathcal{O}_X -加群 \mathcal{F} に対し \mathcal{Y} に沿った formal completion $\hat{\mathcal{F}}$ の自然な fine resolution \mathcal{F} と $\hat{\mathcal{F}}$ とを見と置く。

命題 2. $\forall x \in \mathcal{Y}$ に対し $\hat{E}_{X,x}$ は $\mathcal{O}_{X,x}$ 加群として忠実に平坦である。

証明 $\tilde{\mathcal{F}} \in \text{presheaf } U \rightarrow \prod_{u \in U} \mathcal{F}_u$ (\mathcal{F}_u : $u \in U$ における形式的巾級数環) により定義される X 上の \mathcal{O}_X -加群の層と可る。各 $x \in \mathcal{Y}$ に対して, 自然な環の包含関係 $\mathcal{O}_{X,x} \subseteq \hat{E}_{X,x} \subseteq \tilde{\mathcal{F}}_{\bullet,x}$ が存在可る。 $\tilde{\mathcal{F}}_x$ は [8, III. Cor. 4.13] により忠実に平坦な $\mathcal{O}_{X,x}$ -加

群があるから、任意のイデール $\alpha \in \mathcal{O}_{X,x}$ に対し、 $\alpha \tilde{J}_x \cap \hat{E}_{X,x} = \alpha \hat{E}_{X,x}$ であることは見れば十分である (cf. [8, III, Prop. 4.7]). 実際これは、[8, VI, Th. 1.2] の特殊の場合である。(ε の記号を $\alpha \tilde{J}_x \cap \hat{E}_{X,x} = \alpha \tilde{J}_x(\gamma) \cap \hat{E}_{X,x}$ とする ε に注意.) Q.E.D.

系 J は連接 \mathcal{O}_X -加群、 \hat{J} は J の γ による formal completion である。この時複体 $E_X^{\bullet}(\hat{J}) \stackrel{\text{def}}{=} \hat{E}_X^{\bullet} \otimes_{\mathcal{O}_X} J \cong E_X^{\bullet} \otimes_{\mathcal{O}_X} \hat{J}$ は \hat{J} の自然な fine resolution である。

J は $\mathcal{G}^{\bullet} E_X^{\bullet}(J) = \mathcal{G}^{\bullet} E_X^{\bullet} \otimes_{\mathcal{O}_X} J$, $E_X^{\bullet}(J) = E_X^{\bullet} \otimes_{\mathcal{O}_X} J$ とおく。 \mathcal{O}_X J は (2) の F 行の作用をせる ε と ε より完全列

$$(5) \quad 0 \rightarrow \mathcal{G}^{\bullet} E_X^{\bullet}(J) \rightarrow E_X^{\bullet}(J) \rightarrow E_X^{\bullet}(\hat{J}) \rightarrow 0$$

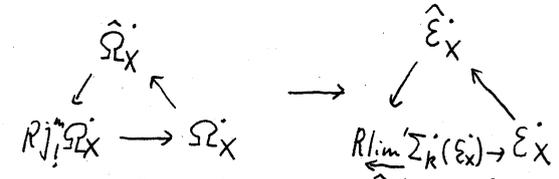
を得る。命題 1 (2) にいう '(2) の F 行 $\otimes J$ とは (5) に他ならない。

命題 1 の証明 1) $\Sigma_k(E_X^{\bullet}) = \mathcal{G}^k E_X^{\bullet} + d(\mathcal{G}^k E_X^{\bullet-1})$ とおく。 $\text{pro-}\mathcal{C}(X)$

内の完全列の可換図式

$$\begin{array}{ccccccc} 0 & \rightarrow & \Sigma_k(\Omega_X^{\bullet}) & \rightarrow & \Omega_X^{\bullet} & \rightarrow & \Omega_X^{\bullet} / \Sigma_k(\Omega_X^{\bullet}) \rightarrow 0 \\ & & \downarrow & & \downarrow & & \downarrow \\ 0 & \rightarrow & \Sigma_k(E_X^{\bullet}) & \rightarrow & E_X^{\bullet} & \rightarrow & E_X^{\bullet} / \Sigma_k(E_X^{\bullet}) \rightarrow 0 \end{array}$$

から triangles の向う写像



が得られる (補題 3 参照)。 $\hat{\Omega}_X^{\bullet} \rightarrow \hat{E}_X^{\bullet}$, $\Omega_X^{\bullet} \rightarrow E_X^{\bullet}$ は夫々上の系を通常。 Dolbeault-Grothendieck 補題 n より同形であるから上の triangles は同形である。一方 $E_X^{\bullet} \rightarrow \hat{E}_X^{\bullet}$ の surjectivity は

$R^i \varprojlim^k \Sigma_k(\mathcal{E}_X) = 0$ と同値であり, $R^i \varprojlim^k \Sigma_k(\mathcal{E}_X) = 0, i \geq 2$ と
 あわせて (cf. 補題 3 の証明), $R \varprojlim^k \Sigma_k(\mathcal{E}_X) \cong \varprojlim^k \Sigma_k(\mathcal{E}_X) \cong \varprojlim^k \mathcal{E}_X$
 $\cong \mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X$ と得る. 2) $\mathcal{F} = \mathcal{O}_X$ の場合は可換図式

$$\begin{array}{ccccccc} 0 & \rightarrow & \mathcal{J}^k & \rightarrow & \mathcal{O}_X & \rightarrow & \mathcal{O}_X / \mathcal{J}^k & \rightarrow & 0 \\ & & \downarrow & & \downarrow & & \downarrow & & \\ 0 & \rightarrow & \mathcal{J}^k \mathcal{E}_X & \rightarrow & \mathcal{E}_X & \rightarrow & \mathcal{E}_X / \mathcal{J}^k \mathcal{E}_X & \rightarrow & 0 \end{array}$$

から上と同様に示される. 一般の場合は, $(Rj_! \mathcal{O}_X) \otimes_{\mathcal{O}_X} \mathcal{F} \cong Rj_! \mathcal{F}$ を示して $\mathcal{F} = \mathcal{O}_X$ の場合から導く.

次に今示す述べたことと 'dual' に対応する事実について
 簡単に述べる.

\mathcal{D}_X は X 上の currents の芽の層, $\mathcal{D}_{Y^\infty} = \Gamma_Y(\mathcal{D}_X)$, \rightarrow
 より Y の台が含まれるような currents の層, $\mathcal{D}_{X/Y^\infty} =$
 $\mathcal{D}_X / \mathcal{D}_{Y^\infty}$ とする. 明らかに完全列

$$(5) \quad 0 \rightarrow \mathcal{D}_{Y^\infty} \rightarrow \mathcal{D}_X \rightarrow \mathcal{D}_{X/Y^\infty} \rightarrow 0$$

が存在する. (5) は次の意味で (1) の F 列の dual であることに
 注意しておく. $V \in X$ の任意の開集合とする時, 通常位相
 に関して $\Gamma(V, \mathcal{E}_X)$ は FS (Fréchet-Schwartz)-複体であり; この
 位相に関して $\Gamma(V, \mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X)$ は局. (Whitney), $\mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X$, $\Gamma(V, \hat{\mathcal{E}}_X)$
 も自然な FS-複体の構造を持つ. 一方 $\Gamma(V, \mathcal{E}_X) \times \Gamma_c(V, \mathcal{D}_X)$
 $\rightarrow \mathbb{C}$ は自然な perfect pairing に関して $\Gamma(V, \mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X)$ の零化空間
 が $\Gamma_c(V, \mathcal{D}_{Y^\infty})$ となる; 従って $\Gamma_c(V, \mathcal{D}_{Y^\infty}), \Gamma_c(V, \mathcal{D}_{X/Y^\infty})$ は
 夫々, $\Gamma(V, \hat{\mathcal{E}}_X), \Gamma_c(V, \mathcal{J}^\infty \mathcal{E}_X)$ の位相 dual であり自然に DFS-

複体の構造を行つ。こゝに \mathbb{C} は \mathbb{C} の \mathbb{C} 台と表す。こゝに
 の意味は定理 1 の dual が存在するはずだから、これは可逆な
 Poly [9] により得られよう。

定理 (Poly) 局所コンパクト \mathbb{C} -群の triangle (5) に同伴なものは

$$\begin{array}{ccc}
 Rj_+ \mathbb{C} & & \mathcal{D}'_{X/Y^\infty} \\
 \swarrow & \cong & \swarrow \searrow \\
 R\Gamma_Y(\mathbb{C}) \rightarrow \mathbb{C} & & \mathcal{D}'_{Y^\infty} \rightarrow \mathcal{D}'_X
 \end{array}$$

同形。(X 上の \mathbb{C} -ベクトル空間の層の可逆 \mathbb{C} -複体の導来圏を)

こゝ前と同様、(5) の analytic な表示を考へるのだが、この \mathbb{C} は
 Dolbeault に対応する次の完全列にも注意しておく。

$$(6) \quad 0 \rightarrow \text{Hom}_{\mathcal{O}_X}(F, \mathcal{D}'_{Y^\infty}) \rightarrow \text{Hom}_{\mathcal{O}_X}(F, \mathcal{D}'_X) \rightarrow \text{Hom}_{\mathcal{O}_X}(F, \mathcal{D}'_{X/Y^\infty}) \rightarrow 0$$

こゝに F は任意の連結 \mathcal{O}_X -加群。実際、[, VII. Th. 2.4] により

$\mathcal{D}'_{Y^\infty, x}$ は injective $\mathcal{O}_{X, x}$ -加群である ($x \in Y$)。

共変左完全関数 $\ell(x) \rightarrow \ell(x)$ を次式で定義する。

$$\begin{aligned}
 \Gamma_*(F) &= \varinjlim_k \text{Hom}_{\mathcal{O}_X}(\mathcal{O}_X/g^{k+}, F) \\
 j_*^m(F) &= \varinjlim_k \text{Hom}_{\mathcal{O}_X}(g^{k+}, F)
 \end{aligned}$$

完全列 $0 \rightarrow g^{k+} \rightarrow \mathcal{O}_X \rightarrow \mathcal{O}_X/g^{k+} \rightarrow 0$ の左完全関数 $\varinjlim \text{Hom}_{\mathcal{O}_X}$
 (\cdot, F) を apply して $\text{Dl}(X)$ における triangle

$$(7) \quad \begin{array}{ccc}
 & Rj_*^m(F) & \\
 & \swarrow \quad \searrow & \\
 R\Gamma_*(F) & \longrightarrow & F
 \end{array}$$

を得る。同様の関数 $\ell(x) \rightarrow \ell(x)$

$$\text{Hom}^m(F, \mathcal{O}_X^n) = \varinjlim_k \text{Hom}_{\mathcal{O}_X}(g^{k+} F, \mathcal{O}_X^n)$$

$$\text{Hom}_{*Y}^n(\mathcal{F}, \Omega_X^n) = \varinjlim_R \text{Hom}_{O_X}(\mathcal{F}/\mathcal{I}^{R+}\mathcal{F}, \Omega_X^n)$$

ε 定義 L triangle

$$(8) \quad \begin{array}{ccc} & R\text{Hom}_{*Y}^n(\mathcal{F}, \Omega_X^n) & \leftarrow \\ & \swarrow & \\ R\text{Hom}_{*Y}(\mathcal{F}, \Omega_X^n) & \longrightarrow & R\text{Hom}_X(\mathcal{F}, \Omega_X^n) \end{array}$$

ε 得る。 $n = \dim X$.

\mathcal{F} が \mathcal{I} による局所自明な \rightarrow (これより $\mathcal{F} = \Omega_X^n$)

$$[\ast_Y(\mathcal{F})] \cong R\text{Hom}_{*Y}(\mathcal{F} \otimes_{O_X}^* \Omega_X^n, \Omega_X^n), j_*^m(\mathcal{F}) = R\text{Hom}_Y(\mathcal{F} \otimes_{O_X}^* \Omega_X^n, \Omega_X^n)$$

が成立する。 n に注意。 命題 1 の dual として次を得る。

命題 3 1) $DM(X)$ において、(5) に同様の triangle と (7) の $\mathcal{F} = \Omega_X^n$ としたものは自然な同形である。

2) \mathcal{F} が任意-連接 O_X -加群である時、(6) の同様の triangle と (8) の $\mathcal{F} = \mathcal{F}$ としたものは、 $DM(X)$ において自然な同形である。

証明略。 最後に以上の応用として Ramis-Ruget の才 1 双対定理 [1] の 'meromorphic' analogue が得られることに注意しておく。

$\mathcal{F} \in DM(X)$ に対して $\Gamma(\mathcal{F}) = \Gamma(X, \mathcal{F})$ とする。 $U \in X$ の閉集合 Z の U 内に含まれるものの全体からなる台の族とする。 次の記号を用いる。

$$H_{\mathbb{Q}}^i(U, \mathcal{F}) = R^i(\Gamma \cdot j_!^m)(\mathcal{F}), \text{Ext}_{*Y, c}^i(X, \mathcal{F}, \Omega_X^n) =$$

$$R^i(\Gamma_c \cdot \text{Hom}_{*Y}(\mathcal{I}, \Omega_X^n)) \text{Ext}_{m, c}^i(U, \mathcal{F}, \Omega_X^n) = R^i(\Gamma_c \cdot \text{Hom}_U^m(\cdot, \Omega_X^n)(\mathcal{F}).$$

(4) と (8) から完全列

(c: compact support)

$$(9) \quad \cdots \rightarrow H_{\mathbb{Q}}^i(U, \mathcal{F}) \rightarrow H^i(X, \mathcal{F}) \rightarrow H^i(\hat{X}, \hat{\mathcal{F}}) \rightarrow \cdots$$

$$(10) \quad \cdots \leftarrow \text{Ext}_{m, c}^{n-i}(U, \mathcal{F}, \Omega_X^n) \leftarrow \text{Ext}_c^{n-i}(X, \mathcal{F}, \Omega_X^n) \leftarrow \text{Ext}_{*Y, c}^{n-i}(X, \mathcal{F}, \Omega_X^n) \leftarrow \cdots$$

と得る。この時定理は次の形に述べられる。

定理 3 (9) の各項に自然な QFS (= quotient of FS) 構造, (10) の各項に自然な QDFS (= quotient of DFS) 構造, (9) と (10) の間の自然な \mathbb{C} -双線形 pairing が存在し, この pairing は対応する各空間に同伴の Hausdorff 位相空間の間の位相双対を引き起す。このよゝり, QFS, QDFS 構造は一意的である。さらに H^i の separation と Ext_c^{n-i+1} の separation は同値である。(但し X は純次元 n と仮定しに。)

証明は Malgrange の Serre 双対定理の証明とほぼ同様である。

([1, VII. §4] 参照) .

文 献

- [1] Banica, C., and Stamasila, O., Algebraic methods in the global theory of complex spaces, John Wiley 1976.
- [2] Grothendieck, A., On the de Rham cohomology of algebraic varieties, Publ. Math. IHES 29 (1966), 95-103
- [3] Hartshorne, R., Residues and Duality, Springer Lecture Notes 20 (1966).
- [4] Hartshorne, R., On the de Rham cohomology of algebraic varieties, Publ. Math. IHES — (1975).
- [5] Herrela, M. and Lieberman, D., Duality and de Rham cohomology of infinitesimal neighborhoods, Invent. math. 13 (1971), 99-124.
- [6] Hironaka, H., Bimeromorphic smoothing of a complex-analytic variety,

Warwick, 1991.

- [7] Kantor, J.-M., Le complexe de Dolbeault-Grothendieck sur les espaces analytiques, Séminaire Lelong, 14^e année, 1973/74, Springer Lecture Note 474.
- [8] Malgrange, B., Ideals of differentiable functions, Oxford Univ. Press, 1966.
- [9] Poly, J.-B., Sur l'homologie des courants à support dans un ensemble semi-analytique, Bull. Soc. Math. France, Mémoire 38 (1974), 35-43.
- [10] Ramis, J.P., et Ruget, G., Complexes dualisants et théorème de dualité en géométrie analytique complexe, Publ. IHES, 38, 77-91 (1970).
- [11] Sasakura, N., Complex analytic de Rham cohomology I, Proc. Japan Acad., 49 (1973), 718-722, II, ibid. 50 (1974), 292-295, III, 51 (1975) 7-11, IV, 535-539.
- [12] Brieskorn, E., Die Monodromie der isolierten Singularitäten von Hypertflächen, Manuscripta Math. 2 (1970), 103-161.